

連載
講座

“めいわ丸”に止めを刺されなかった田沼意次

歴史家・作家 加 来 耕 三

ランドマーク

陸 標が江戸城から富士山へ

人間にとって、日々快適な生活を過ごすほど、暑いことはあるまい。

江戸時代、百万都市となった江戸の、全体の16%の土地に、商人、職人——俗に言う“町人”が約50万人生活していた。

270万坪（9平方キロ）である。10人に9人までが裏長屋（今日の規模でいう1Kのアパート）に住み、その人口密度は1平方キロ当り、5、6万人が詰め込まれていた計算になる。

これは逼塞（せまりふさがる）であり、とても快適と呼べるものではなかったであろう。

もともと新興の江戸は、“武府”であり、将軍と武士たちの都市であって（1169坪・69%）、町人は付け足しにすぎなかった（寺社地は残り15%）。

その証左に江戸の陸標は江戸城でありつづけた。

ところが、ある時代を画して陸標は、富士山に取って代われ、江戸の主人公は“江戸っ子”と呼ばれる町人たちに変貌してしまった。

「二本差が怖くて目刺が食えるか」

この“ある時代”を後世、日本史では「田沼時代」と呼んだ。

徳川幕府の「御側用人」（将軍の命令を老中に伝える役職）と老中（幕府最高の職）を兼ねた田沼意次が、幕政を運営していた時代をいう。

米から貨幣の経済へ

意次の父・意行は、8代将軍・徳川吉宗の誕生とともに幕臣に直った人物で、意次が6歳の享保9年（1724）に従五位下主殿頭となり、のち家禄を600石に増やし、享保19年に亡くなっている。

父の跡を継ぎ、15歳で将軍世子（のち9代将

軍）家重の小姓となった意次は、細面に眉目秀麗な美男子の外見と冷静沈着で芯の強い、何事も粘り腰の性格をもって、9代家重—10代家治の2代将軍に仕え、明和4年（1767）には御側御用人となり、大名として遠州相良（現・静岡県牧之原市）に城を持つ身分となる。彼が老中となるのは、安永元年（1772）のことであった（54歳）。

ところが、明和の頃、老中・秋元涼朝がすれちがったのに拝礼しなかった意次の不敬を、意次の同僚を呼びつけてとがめたことがあった。

この時、涼朝は「意次の讒を恐れて病と称して出ず」＝老中を自ら辞職している。すでに意次は絶大な権力を握っていた、といえなくはない

幕閣を自派で固め、大奥を味方につけた意次が、それまで老中首座をつとめていた松平武元——唯一頭の上がらなかった先輩——が安永8年に亡くなると、ほぼ独裁に国政を壟断（ひとりじめ）する「田沼時代」を本格的に開始させた。

意次の狙いは、すでに8代将軍・徳川吉宗の「享保の改革」で明らかとなった、重農主義政策の限界——これ以上、税を取り立てては農民が潰れる——を重商主義政策に転換することであり、わかりやすくいえば、武家社会をおびやかすとして、これまで幕府が敵視して来た商業を、逆に取り込み、幕府の制御下に置くというもの。

米経済を貨幣経済、商品経済に展開するということであった。

具体的には同業の組合である株仲間を集めて「冥加金」「運上金」といった営業税、事業税を徴収しようという、画期的なものであった。

ただ、幕府公認の印＝鑑札を出して、商売上の特権を与える代わりに、金を徴収するという方針を、意次は野放しにされてきたあらゆる商業活動に広げた。否、広げすぎた。

吉原よしわらのような幕府公認ではなく、隠れて遊女を置く「岡場所」にも上納会おかばしよ所を設け、税を取ることを行っている。

幕府が慢性赤字に苦しみ、幕府財政の再建にも財源が必要であったのはわかるのだが……。

意次が創り出した「江戸っ子」

意次は新田開発で印旛沼いんぱぬま、手賀沼てがぬまの干拓計画かんたくを実行に移し、蝦夷地えぞ（現・北海道）の調査・開発にも着手している。推定面積の1/10 = 116万400ヘクタールが、耕作可能との調査結果から、彼は580万石の田畑の開墾を決断している。

後世から俯瞰した場合、歴史は意次の目指した方向へ進んでいく。商い・貿易はやがて、「開国」へつながったであろう。

現に江戸は未曾有の発展を遂げ、1日2食の生活は3食となり、町人の着るものに絹が加わるようになった。今日、日本料理の代表のようにいわれる、江戸前の寿司、天ぷらが工夫され、料理茶屋も本格化した。

江戸の「情報伝達王」メデライア 蔦屋重三郎つたやじゅうざぶろうが独自の『吉原細見』ガイドブック、狂歌絵本、黄表紙きびょうしなどを次々と出版したのも、「田沼時代」であった。

江戸に賑わいと繁栄をもたらし、「江戸っ子」が主人公となって、庶民の人権は向上した。

「大江戸」という言葉を、町人が使うようになったのもこの頃のこと（「大江戸」の初出は、山東京伝さんとうきょうでんの洒落本しゃれぼん『通気粹語伝』つうきすいごでんだった、と筆者は思っている）。

「江戸っ子」に退場させられた意次

だが、ものごとにはかならず、長所があれば短所がある。

「主殿頭（意次も父と同じ官名）がいつもいうには、金銀は人の命にもまさる宝であり、その宝を贈っても奉公したいと願う人であれば、上に対して忠であることは明らかである。志こころざしの厚いか薄いかは、贈り物の多い少ないによってわかるものだ」（『江都見聞集』より筆者、現代語訳）

意次に面会するのに120両（現在の2000万円ほど）はかかる、などといわれる側面が、彼に押さえつけられた反対派の人々から漏れ伝えられるようになる。その代表が白河11万石の藩主・松平定

信のぶ（意次より40歳年下）であった。が、完璧なまでに設えられた田沼体制は、批判が起きても微動だにしなかった。

——敵は人間ではなく、「天変地異」であった。

「田沼時代」に重なるように飢饉ききん、疾病しつぺい、大火事が発生した。

なかでも明和7年から翌年に諸国を襲った早魃かんばつ、同9年3月の「明和の江戸大火」（めいわ九）は凄まじかった。類焼地域は江戸の約1/3に及び、死者1万4700人、行方不明者4060余人。あまりのひどさに、年号が「安永」と改められた。

しかし、それでも意次の政権は倒れなかった。

その後も安永2年に江戸で発生し、2カ月で19万人が死亡した疾病、そして天明2年から7年にかけての「天明の大飢饉」——。

その最中、天明3年7月には浅間山が噴火し、降る灰が関東・信州一円に被害をもたらし、惨状じんだいかを甚大化した。

誰が意次の立場であっても、この打ちつづく天変地異に、どれほどの対処ができたであろうか。

まして、江戸時代である。が、民衆は常に善人と悪人を分け、判断したがるもの。

まして天明4年3月には、意次の息子で若年寄わかどしとなっていた山城守意知やましろのかみおきともが、江戸城を退出するところを、佐野善左衛門政言さの まさこと（500石取りの旗本）に斬りつけられ、駕籠で自宅へ運ばれたものの、26日の夜明けに死んでしまった（意次66歳）。

それでもこの年、意次は蝦夷地開拓に着手している。

けれども、天明6年8月27日、彼は老中職を免ぜられる。ときに68歳。実はこのとき、意次を信頼しつづけていた将軍家治が、8月20日に崩御していたのだが、将軍の言として御三家・御三卿——政治にたずさわっていない人々によって、意次は追われ、9月7日、家治の薨去が公表されるに及ぶ。2年後、意次は何一つ抗弁することもなく、静かにこの世を去った。享年70。

彼は世相そのものを、時流の必然と見ていたように思う。武士の凋落も、町人の台頭も、すべてそうなる理由があるのであり、その流れに即して手を打つのが政治の妙諦みょうていと考えていたようだ。

歴史は必然であり、偶然であることを、この人物ほど明快に語った人はいなかった。にもかかわらず、その人物評価は今も定まっていない。（了）